

はありもやせんすらん、同じくは存命の中に、尊號の儀もあらば、いかに本意ならん、さてこそ君
 ○後 花園の聖運開きまします、さるしも、いよゝゝ氣味はあらめとおぼえ侍る、何事も人の偏執によ
 きて、當座はどかく申なし侍るとも、昔の例は世のさる所なれば、今さら申に及ばざる事なり、
 略 よろづ雲ひのよそにき、奉るばかりにて過し侍る、よろこびの中のうちへにて侍るなり、か
 らうの道理をおぼしめしわくべき、君の御せいしんを待奉れば、老の命も長かれかしと、いよゝい

御代安全、寶祚の長久ならん事を念じ侍るばかりなり、

〔皇胤詔運錄〕貞成親王文安四、十一、廿七、太上天皇尊號、康正二、八、廿九、崩、八十五、奉、號、後崇光院、

〔建内記〕文安四年三月六日丁酉、伏見宮入道貞成親王、禁裏御實父事也、尊號事、近日頻有御所望、未治定、若及其

沙汰者、御叙品強雖無宣下、彌不可及、沙汰之由、有内議歟云々、但院中事、自今可爲嚴然之條、如祇候

人難治無人之基歟之由、又有其沙汰云々、此事後小松院遺詔之第一也、尊號事、未來有勅許者當今

○後 花園繼嗣之由、可治定歟、然者後光嚴院御流忽斷絕歟、日來勅約如空、不可有尊號之沙汰、是舊院仙

洞、在正親町以北、東洞院、以西、晴面者烏丸也、不可爲伏見宮御所事、是二御追號可爲後小松院事、三被載勅書、御病中以大

祥寺方丈、于時東堂、爲當住也、被進普廣院殿、義教、了、御追號事、平家小松内府盛、之稱、無庶幾之由、普廣院

殿、其時一旦雖有御沙汰、任遺詔被用了、略、中尊號事、聖斷之樣、追可尋記、廿三日甲寅、伏見入道貞

成親王者、禁裏御實父也、仍太上天皇尊號宣下事、被申請之、被尋入々意見、可有御沙汰之由、同被申

之也、勅問不可及、廣、可爲兩三人、其内先予、時藤原可計申之由、勅定之旨、禪正尹示之、予申云、綺重事

也、輒難計申、但如愚意者、於常儀者、被配嚴父於天、不能左右也、而後小松院如御所生、被契約御父子

之儀了、舊院御病中、被遣勅書於普廣院殿、訖、三个條有遺詔事云々、如傳聞者、伏見宮依御實父、尊號

事、不可被宣下、若被宣下者、御違變之義出來之基歟、然者後光嚴院御一流、忽可爲斷絕之儀歟、仍有

遺詔也、仙洞不可被成、伏見宮御所事、御追號可爲後小松院事、以上三个條云々、伴勅書者、以大祥寺